

新担任への効果的な引き継ぎで 4月のスタートをスムーズに切る

1年間の生徒情報を次の学年団に引き継ぐことは、新担任のスムーズな生徒理解と生徒の気持ちの切り替えを後押しするために重要である。また、上級生の経験を下級生に還元することは、先を見通した指導をする上で有効だ。この時期の新・旧学年間における効果的な情報の共有について考える。

※このコーナーは、高校の先生方との会議を経て制作しています。掲載しているデータなどは、先生方が実際に活用されているものを基にしています。

生徒の「ありのまま」を引き継ぐ

図1 生徒に振り返りをさせる「1年間のまとめシート」



●今年度のあなたの10大ニュース

1位	
2位	
3位	
4位	
5位	
6位	
7位	
8位	
9位	
10位	

「10大ニュース」は生徒を多面的に把握する際に生かす項目。学習面・生活面での点数をつけ、その理由を記述させることは、生徒に振り返りをさせると同時に、次年度から担当する教師の適切な声掛けを促し、各生徒の目標設定につなげる材料とする。

●今年度を振り返り、学習面・生活面での点数を100点満点で採点しよう

学習面	点
理由	

生活面	点
理由	

●今年度一番頑張れたこと

●今年度一番悔いが残っていること

●次年度の抱負

担任からのコメント欄

学年で検討する「余地」を残す

図2 文理選択での生徒・保護者の質問引き継ぎシート



時期	文理選択までの流れ	この時期の生徒からの質問	この時期の保護者からの質問
1学期末	学年集会で説明	・文理選択をすると志望変更できないのか？ ・行きたい大学や学部がまだ決まっていないのに、どうやって選べばいいのか？	・どうしてこの時期に文理選択をするのか？ ・どういう観点で選ぶべきか？
2学期初め	三者面談	・保護者は理系を勧めるが、自分は文系が合っていると思う。どうすればいいか？ ・文理共に苦手科目あり。どう選択すればいいか？	・本校では、理系の進学実績が良いように思えるが、文理どちらを選ぶかで有利・不利はあるのか？
2学期初め	保護者会	・仲の良い友達はみんな文系に進む。自分も文系に進んだ方がいい？ ・文系理系どちらも興味があるのだけれど……	・子どもには理系クラスを勧めているが、こちらの言葉に耳を貸そうとしない。どこまで保護者は関与すべき？
2学期初め	文理選択シート提出	・社会と理科が得意なだけで、文理どちらの方が合っているのか？ ・次の模試結果が出るまで結論を伸ばせないか？	・実際に理系に進んで、もしも授業について行けなくなった場合、学校はどんな指導を行うのか？



このマークのある図版は、加工可能なデータとして、小誌ウェブサイトからダウンロードできます。
<http://benesse.jp/berd/> →HOME>情報誌ライブラリ(高校向け)>生徒指導・進路指導ツール集

1
「教師・生徒へのデータ活用」
新・旧学年団で生徒・保護者情報を共有する

「点」の引き継ぎから 「線」の引き継ぎへ

新学年団に生徒情報を引き継ぐ際に、その時点での生徒の状態だけでなく、4月から1年間かけて、生徒がどのように成長してきたかを伝えるように心掛けたい。長い時間の中で生徒の成長を語れるのは、生徒を間近で見てきた現担任だからこそ出来ることであり、成長のプロセスを「線」で捉えた引き継ぎは、新担任にとって貴重な情報となる。なお、現担任は「時間はかかっているけれども、1年間でこれだけ成長した」と、肯定的な視点で生徒を語るように心掛けたい。

担任だから気がつく項目に こだわる

生徒から収集した図1「1年間のまとめシート」に現担任がコメントを記入することは、現担任の思いを新担任に伝える効果もある。このとき、生徒自身が書ききれていないことはないか、担任だからこそ分かる情報が漏れていないかという点にも注意を払いたい。特に、「何か困っているクラスメートがいれば快く手助けする」「普段は目立たないが、役割を担えばしっかりとリーダーシップがとれる」など、担任だから気がつく生徒の資質はシートに記入し、生徒への激励と新担任への引き継ぎのメッセージとしたい。

「手応えのあった」行事を 生徒と保護者の言葉で振り返る

進路関連の行事の成否は生徒一人ひとりの内面の成長にあるため、数値として評価しにくく、学年としての総括が行いにくい。そのため、あらかじめ決められた取り組みを無事にこなせたことで「何となく成功した」と総括されているものも多い。図2は次年度への引き継ぎ資料として紹介したもののだが、このような資料を作成する過程で生徒や保護者の声を整理することで、行事がどのように受け止められたかを実際に行事を行った学年自ら振り返ることが出来る。次年度以降に行事を吟味する情報として、生徒や保護者の言葉を活用したい。

活用後のフォロー

◎旧学年団から新学年団へ引き継いだ情報がどのように活用されていくかは、新学年団の判断に任される。そのため、旧学年団から積極的にアプローチしていくことは難しい。だが、学校として、引き継ぐべき情報の提供や、必要とされれば情報の共有はいとわない姿勢を明らかにしておくことは必要だ。学年の「色」は残しつつ、学校のSI（スクール・アイデンティティ）やSIに基づいた取り組みを構築し、継承していくことは多くの学校にとっての課題である。図2のような「生徒・保護者の声」という切り口だけでなく、多様な方法を検討していきたい。

データ活用
のねらい

新学年を尊重した引き継ぎを

生徒の「ありのまま」を引き継ぐ ●次年度の学年団への引き継ぎでは、生徒のマイナス面のみを伝えがちだが、そればかりでは新担任は生徒に対して偏った先入観を抱きかねない。図1「1年間のまとめシート」を活用し、生徒の声を聴取することで、生徒の「ありのまま」の状況を引き継ぐことが出来る。生徒把握の資料として活用できるだけでなく、生徒自身が記入することで、1年間の振り返った上で新たな目標を設定するきっかけにもなる。

生徒・保護者からの質問を引き継ぐ ●学校によっては、学年の「色」を尊重して旧学年団から新学年団への取り組みの継承をあえて積極的には行わないところもある。その場合、図2のように、生徒や保護者から疑問が出やすい文理選択などの取り組みに絞って引き継ぐのも一案だ。行事そのものが保護者や生徒にどう受け止められたのかを引き継ぐことで、新学年で検討する「余地」を残しつつ、取り組みの総括を引き継ぐことができ、学校として取り組みの充実が図られる。

データ活用
の流れ

活用の主体は新学年団に

生徒の振り返りを教師の引き継ぎに活用 ●図1のように、学年で書式を統一し、現担任が生徒に1年間の振り返りを記入させる。書くことを通して生徒が深く内省するように、記入欄は大きめの枠を設ける。その後、現担任がコメントを記入してからコピーし、生徒に返却すると共に、次年度の担任団に渡す。新担任は直筆のシートから生徒のありのままを理解でき、新学期の面談にも活用できる。適宜フィードバックすれば生徒の自己変革を促すことが出来る。

「余地」をつくることで、学年団の結末が固まる ●現学年団の教師に文理選択ではどんな質問が生徒・保護者から上がったのか、指導のプロセスに従い時系列で聞き取りを行う。それを学年代表の教師がまとめ、一覧化し、新学年団に引き継ぐ。

1年間の自分を 振り返らせながら 自己変革を促す

図1を配布。1年間の振り返り、学習や生活の状況、更に次年度の抱負を記入

担任がコメントを記入し、コピーする。原本は生徒に返却し、複写したものは新担任へ引き継ぐ

新担任はクラス運営の資料として活用。図2と合わせて、4月の時点での学年団での共有資料としてもよい

4月に行う進路意識調査と合わせて、面談などで生徒に適宜フィードバックし、自己変革を継続的に促す

図3 2年生から「3年生への質問状」&3年生からの回答



●2年生から質問を聴取<高2→高3>

3年生への質問状

- ◎学習面で聞いてみたいこと
- ◎生活面で聞いてみたいこと
- ◎その他(進路選択など)

①2年生から質問を集め、教師が「2年生の意識付けに役立つのではないか」と感じるものを、3年生に投げ掛ける
②3年生から得た回答を、2年生向けにまとめる

●2年生から受けた質問を3年生が回答する<高3→高2>

質問 自分の行きたい大学が決められない時、どうやって決心を固めていきましたか

進学先	部活	質問への回答
〇〇大	サッカー部	先生や友達によく相談をしました。自分一人で悩んでいると不安になるばかりで、決心を固めるまでにはならなかったと思います。
△△大	バレーボール部	気になる大学に足を運ぶようにしました。自分がここで学ぶことをイメージできるかどうかが重要だと感じました。

質問 部活動と学習の両立が出来そうもないです。部活動を辞めようか迷っています

進学先	部活	質問への回答
■●大	野球部	自分も部活に疲れて家に帰るとすぐ寝てしまい、部活を辞めようか悩んだ。でも今振り返ると、受験勉強も部活の仲間がいたから頑張れた。部活を続けたからこそ受験も頑張れたんだと思う。
△△大	吹奏楽部	自分自身でじっくり考えて、先生や保護者に相談して決意するのであれば、辞めるのも一つの選択肢だと思う。

図4 3年生が証明する「A高校の定説」 〈高3→高2〉



A高校の定説	先輩の声
行事で盛り上げられるクラスは、受験でも良い結果が出る	・3年生の時のクラスは体育祭などで一番団結したと思う。しかし、行事のあとの切り替えやその後の学習への集中力もすごかった。
掃除が行き届いたクラスは、勉強にも集中できる	・3年生になって担任の先生が「教室を片付けなさい」と何度も言うようになった。最初は面倒だったけれど、きれいになると授業にも集中できたような気がした。
部活動を3年間続けた人の方が、入試を最後まで頑張れる	・部活動をしている時、いかにうまく隙間時間を使うかを考えていた。引退しても、その時に身についた効率的に勉強する姿勢が役立っている。
5教科以外の授業をないがしろにする人は、成績が伸び悩む	・芸術や家庭科の授業をマジメに受ける人は、5教科も当然マジメに受けているし、一部の授業をいい加減に受けている人は、結局、5教科でもいい加減だった。



このマークのある図版は、加工可能なデータとして、小誌ウェブサイトからダウンロードできます。
<http://benesse.jp/berd/> →HOME>情報誌ライブラリ(高校向け)>生徒指導・進路指導ツール集

今回のテーマと関連する過去のバックナンバーも併せてご利用ください！右のウェブサイトをご覧くださいだけです。
●2010年2月号
●「次年度につなげる総括・引き継ぎ」と3年生からのデータ収集
●2010年10月号
「生徒と教師の助走期間としての3年生0学期の意識付け」

Benesse® 教育研究開発センター
<http://benesse.jp/berd/>
生きたデータの徹底活用 クリック！
HOME→情報誌ライブラリ(高校向け)→
生徒指導・進路指導ツール集をご覧ください
加工可能な資料が
ダウンロードできます！

ウェブサイトから
ダウンロード！
生徒指導・
進路指導ツール集

プラス α の指導

2年生からの質問を蓄積し 次年度の指導に生かす

2年生から3年生への質問は、教師にとって生徒がどんなことに悩みや不安を抱いているかを端的に表す資料となる。これを次年度に引き継ぐことで、新2年生担当の教師は先手を打って指導をすることが出来る。もちろん、生徒にとっては悩むことそれ自体が必要である場合も少なくない。すべて教師が先回りして答えを用意すべきではないだろうが、経験の浅い教師には2年生の内面を知っておくだけでも、安心して指導に臨めるはずだ。数年かけて蓄積すれば、生徒像の経年変化も把握できる。

大学進学後に 「大学レポート」を募る

3年生に対しては、高校時代の体験を聞くことはもちろん、新年度が始まってからの進学先での生活の様子や、高校の学習と大学の学びのつながりなどを報告してもらえば、在校生の指導に活用できる資料となる。卒業式の前に、報告してほしい内容と提出時期を明記したプリントを渡しておく。新生活の慌たしさから多くの生徒が忘れてしまい、実際に送られてくるレポートは僅かであるかもしれない。しかし、数は少なくとも、戻ってきたレポートの価値は非常に高いことは言うまでもないだろう。

チェックシート化して 自省を促す

高校生として守ってほしい約束事と、それが進路実現にとっていかに重要であるかを語る3年生の言葉を提示する図4は、そのまま下級生に提示するだけでなく、チェックシート化して取り組ませることも可能だ。「自分は実行できているか」を○×で記入させたり、×の場合は今後どのように改善していくのかを面談で尋ねたりする。3年生の経験を聞き「やっぱりそうなのか」と納得するだけでなく、一歩進めて、「自分を具体的に変えるにはどうすればよいか」まで考えさせたい。

活用後のフォロー

◎新年度の4月、5月という早い段階で「進級を契機に自分は変わったか」「変わろうとして変われないのはなぜか」を問い掛けて、うまく軌道に乗せる材料として先輩データを活用したい。特に受験を終えた3年生の体験を下級生に読ませることは、生徒の学習・生活習慣を変えるのに有効だ。新年度になり、生徒の変わろうという意識を見逃さず、データの活用を行いたい。

年度末の意識付けを徹底したからといって安心するのではなく、新年度の声掛けも入念に行いたい。生徒は教師が声を掛け、繰り返し考えさせることで、ゆっくりと変わっていくものなのだ。

データ活用
のねらい

3年生となる意識を高める

自ら質問することで主体的な理解を促す●新しい1年がどんな1年になるのか、既にそれを経験した上級生に質問することで、今自分が抱えている悩みや受験生となることへの漠然とした不安と向き合うことになり、自覚的に進級させることが出来る。図3のように生徒が自ら考え、質問を出すことにより主体的になり、先輩からの言葉を更に感度高く受け取り、それをモチベーションにつなげていきたい。たとえ、質問の内容が教師が企図したものと同じであったとしても、生徒が自ら考え出した質問であるということに意味があるのだ。

自校の先輩の声で意欲を高める●特に2年生の場合、志望校合格のための1年が始まるという覚悟を持たせることが重要だ。受験生としての1年間を戦い抜いた自校の先輩のデータや声を有効に活用したい。「身近な存在だった先輩たちも頑張っていた」という事実が生徒の背中を押すと共に、図4を用いることでこの高校の3年生として頑張らなければという強い意識も生まれる。また、3年生にとっては、この学校の生徒として何を守ってほしいかという後輩へのメッセージにもなる。

データ活用
の流れ

生徒、教師の聞きたいことを収集

3年生の「生の声」を2年生に届ける●図3の「3年生への質問状」のシートを活用し、2年生から3年生に聞きたい質問を集める。教師が質問を分類して、3年生に回答してもらおう。可能な範囲で回答に多様性を持たせ、2年生に紹介する。自分に近い意識や立場の先輩の回答を読むことで、より納得感が高まるからだ。

教師が聞きたい話題も取り上げる●生徒からの質問では出にくいのが、教師として取り上げたい話題もある。「予習復習の重要性」「授業中心の受験対策」などだ。教師が常に生徒に訴える「定説」について、3年生が結果としてどう感じたかを図4のように教師から質問する。生徒ならではの説得力ある言葉で証明してくれるだろう。

主体的な質問から 受験生になる 覚悟を持たせる

図3を配付し、2年生から3年生への質問を募る

教師の目線で質問を分類。3年生に回答を依頼する(アンケート、あるいは進路が決まり余裕がある者へのヒアリングなど)

集まった回答を精査し、2年生に提示する。この時に図4も合わせて共有することで、受験生になる覚悟を促す

面談などで上級生の回答から得た気づきと、変えようと思ったことなどを確認する